



■ショートコメント■

◆1978年に公開された、若き頃のロバート・デニーロ主演、そしてメリル・ストリープ初出演の名作を、4Kデジタル修復版で鑑賞。本作の評判は公開当時から知っていたが、1974年に弁護士登録し、1979年に独立した私は、1978年当時、映画館で映画を鑑賞する余裕は全くなかったから、リアルタイムでは観ておらず、TVで鑑賞しただけ。したがって、大スクリーンで、しかも4Kで本作を鑑賞すれば、感慨もひとしおだ。

◆本作は184分の長尺になっているが、それは導入部でベトナム戦争に赴くマイケル(ロバート・デニーロ)、ニック(クリストファー・ウォーケン)、ステイーヴン(ジョン・サヴェージ)の壮行会と、ステイーヴンとアンジェラ(ルターニャ・アルダ)の結婚式の様子を1時間20分もかけて詳細に描いたため。

『プラトーン』(86年)はベトナム戦争を描いた名作中の名作だが、同作ではベトナム現地での戦いに重点が置かれていた。それに対して、本作で描かれるベトナム戦争はごくわずかで、本作のメインになるのは、捕虜になったマイケル、ニック、ステイーヴンの3人が、ベトナム兵の余興として行われているロシアン・ルーレットを命懸けでやらされるシークエンスだ。ロシアン・ルーレットなる“ゲーム”があることは知っていたが、本作を観ているとそれが如何に過酷なゲームであり、その“賭け”の対象とされる人間が如何にギリギリの精神状態に追い込まれるかがよくわかる。そして、そこで対照的なのは、あくまで冷静なマイケルと半狂乱状態に陥ってしまうステイーヴンだが・・・。

◆マイケルはケガひとつなくペンシルバニア州ピッツバーグ郊外にある故郷のクラアトンに帰還できたから、ある意味で英雄。しかし、クリント・イーストウッド監督の『アメリカン・スナイパー』(14年)、『シネマ35』24頁)で描かれたように、イラク帰りの兵士のPTSDの症状が過酷なら、当時PTSDという言葉(病名)はなかったかもしれないが、ベトナム帰りのマイケルのPTSD(?)も深刻だ。

故郷に帰ってからのマイケルは、ベトナム戦争に徴兵されなかった狩り仲間のスタンリー（ジョン・カザール）、アクセル（チャック・アスペグレン）、ジョン（ジョージ・ズンザ）たちにも、ニックの帰りを待ち受けるリンダ（メルル・ストリーブ）にも優しくだったが、やっぱりどこかへん。そりゃ、あのベトナムでの捕虜生活とロシアン・ルーレットの“選手”とされた体験をみれば当然だろう。

他方、あの脱出の時、足に大ケガを負いながらもマイケルの助けによってかろうじて米軍に救助されたスティーブンは？そして、既に帰国しているはずのニックは？

◆スティーヴンには、本作導入部で結婚式を挙げた妻アンジェラが生まれたはずの子供と共に待っているはずだから、足を失って車椅子生活になっても、彼は故郷に戻ればいいだけ。そう思っていたが、スティーヴンにはスティーヴンなりのわだかまりがあったようで、彼はアンジェラの元に帰っていなかった。それは、一体なぜ？

陸軍病院にいるそんなスティーヴンを見舞ったマイケルは、サイゴンからスティーヴンに謎の送金がされていることを聞くと、その送り主はニックに違いないと確信。そして、今や敗北の色が濃くなり、混乱が続くサイゴンに単身赴き、ロシアン・ルーレットを主催している謎の男を通じてニックに会いに行くことに。ニックはあの脱出の時、最初に米軍ヘリに救助されたのだから、一番先に故郷に無事帰還していてもおかしくないはず。ところが、マイケルが帰国した時点でも、ニックの行き先は不明だったが、それは一体なぜ？ニックは一体どこで何をしているの？

2019（平成31）年1月17日記